

生命と心のメレオロジー：歴史と現在

松田毅（神戸大学）・中山康雄（大阪大学）

本ワークショップは、科学研究費補助金平成 22～平成 24 年度基盤研究（B）「メレオロジーとオントロジー——歴史的分析和現代的探究」の共同研究の成果に基づき企画されたものである。アリストテレス（茶谷直人）、ライプニッツ・フッサールの研究者（松田毅）に加え、人工物のデザイン関連の知識工学研究者（長坂一郎）が「部分と全体の理論」の問題を発表の形で提示し、現代的観点も踏まえたうえで討議することが、このワークショップの目的である。

共同研究の過程で浮上した争点のひとつに、哲学史の長い射程で見た時、生命と心をメレオロジーの観点と方法でどう特徴づけるかがある。あるいは心と生命の個性性、その機能・形相のメレオロジカルな問題の解明である。原子論や機械論は、基礎（物理）的存在者を部分とし、部分から合成された全体として、「心」「生命」を特徴づける。ルイスの「ヒュームの付随性」もこれに与する。これに対して、伝統形而上学は、部分全体関係の多様な構造を浮き彫りにし、形相と個体に独自の存在論的身分を与え、現代の形而上学者にもそのような立場を支持するものがある。

この状況を踏まえ、茶谷は、アリストテレス哲学において部分-全体関係が問われる主要場面を概観する。それにより、部分-全体概念が、かれの展開する質料形相論および魂論における鍵概念として機能していることを示す。

松田は、ライプニッツによる「テセウスの船」問題の扱いを、これに関連するインワージーの *Material Beings* (1995) の「生命」の扱いと比較し、生命の存在論的独自性の特徴づけを試みる。

長坂は、生物の機能の哲学者による定式化の概説と工学研究者による人工物の機能の定式化の歴史の概観を通して、両者のギャップを指摘した上で、この問題に関する建築家 C. アレグザンダーの機能論の可能性を論じる。